

5 . オリンピックと資本主義社会

第一報 問題状況と研究計画

内海 和雄

1 . 最近のオリンピックを巡る状況

本稿をまとめている7月初旬は、オリンピック関連としても小激動の日々であった。7月6日のIOC総会（シンガポール）で、2012年のオリンピック開催地がロンドンに決定した。1908年、1948年に続き3回目であり、最多を誇る。とはいえ、前者はローマの代替として急遽決まり、後者は戦後の混乱期、ナチスドイツによる空爆の跡も生々しい時期に開催されたため、これまで、準備万端で望んだことはなかったから、それなりの同情票もあったかも知れない。

ともあれ、総会には、ロンドンの他、最有力と見られたパリ、そしてマドリード、ニューヨーク、モスクワの5都市がエントリーしていた。シンガポールにはイギリスのブレア首相、フランスのシラク大統領、アメリカのヒラリー・クリントン上院議員が直接に乗り込み、それぞれの招致活動を行い、スペインのサパテロ首相とロシアのプーチン大統領もビデオで招致への積極的賛意を表明した。こうして、オリンピックは、単にスポーツ大会に止まらず、都市開発の、時には内外の政治的プロパガンダとしての役割を大きく持たされて、1都市に留まらない、実質的には国を挙げての一大イベントとなってきた。近年になればなるほどその傾向は顕著であり、国家の威信をかけて招致に臨んでいる。それ故、むしろスポーツの位置付けが霞んでしまいかねない雰囲気である。まさに、「スポーツイベントを活用した都市開発、国家政策推進」であり、かつての万国博覧会の現代版の様である。

また、各都市の招致活動費の急騰ぶりも凄まじい。今回ロンドンが60億円、パリが36億円と膨大な額に上り、規模の拡大と同時に招致活動においても、これでは中小都市や発展途上国では開

催できないことになり、今後の対策が指摘され始めている。

7月7日からスコットランドのグレンイーグルスで行われていた先進国首脳会議（G8）に向けて、8日、ロンドンでの同時多発テロが発生した。9日現在、死者50余名、負傷者700余名という爆弾テロはイスラム過激派によると疑われているが、昨年のアテネ五輪の警備費が1500億円であったのを想起すると、今後の不安は増幅する。

そして8日、IOC総会では、2012年の開催種目として、野球とソフトボールの2種目が削除され、一方有力と目された空手とスカッシュの新採用は適わなかった。野球はメジャーリーグ選手が参加していなかったこと、あるいはドーピング対策が緩いこと等が世界最高水準を標榜し、ドーピング対策に大きな比重を置き始めたオリンピックには不満であり、ソフトボールは知名度が低いことが理由であろうと、一般には指摘されている。ともあれIOC会長の計画する縮小案が一步進められた。2016年以降の再開の可能性は残されているとはいうものの、当事者にとって、そしてそれらの種目が盛んな日本にとって大きな痛手であることは間違いない。オリンピックの規模の縮小は、当該国にはこうしたダメージを与えるものであることも痛感した。しかし、今後のオリンピックは開催種目の妥当性についての検討は頻繁に行われる可能性もあり、各種目はこれまでのように既得権に安閑としていることは出来ず、スポーツ普及の日常的な諸活動が問われることになる。

さて、オリンピックは多くの人が多様な意見を述べる。ということは確かにオリンピックへの関心はかなり高いということである。しかし一方で、その総体的な研究は少ない。なぜ研究が少ないのか、この点はもっと遡上に載せて良い。

これまでの総体的な研究の大半はオリンピックの危機論がベースとなっており、オリンピックの果たしてきた平和への貢献については、オリンピック憲章が教条的には反復されるが、実証的研究はあまり無い。その辺りの克服が、今後の研究の大きな課題である。

2. 本研究の全体構成

本研究における全体の構成は以下の7部30章である。計画として当面、5～7年を予定している。本報告は2005年1月25日に行った。本稿では、全体構成の概略を述べるが、先行研究ではあまり触れられなかった点を強調しておく。

オリンピックと資本主義社会

第1部 課題設定

- 第1章 問題状況
- 第2章 先行研究の検討
- 第3章 課題設定

第2部 オリンピックはなぜ復興されたか

- はじめに：時期区分について
- 第4章 19世紀のヨーロッパと体操・スポーツの誕生
- 第5章 オリンピック「復興」の先行例
- 第6章 オリンピズム：クーベルタンの思想と行動

第3部 オリンピックの歴史

- 第7章 オリンピック誕生（過程）
- 第8章 オリンピックの始動期（誕生、不安定）
- 第9章 オリンピック確立期
- 第10章 オリンピック発展期
- 第11章 オリンピックの新たな飛躍

第4部 オリンピックの内的矛盾

- 第12章 IOCの組織原則
- 第13章 IOCと財政（公的援助、資本獲得、商品化、放映権料）
- 第14章 オリンピックの公共性
- 第15章 アマチュアリズムとプロ化
- 第16章 ナショナリズムとインターナショナルリズム（国歌、国旗、表彰、代表）

第17章 ドーピングと勝利至上主義

第18章 ジェンダー・人種

第5部 オリンピックの外的矛盾

第19章 政治的利用

第20章 経済的利用

第6部 日本の資本主義社会とオリンピック

第21章 IOCの誕生と背景

第22章 理念

第23章 IOCの組織

第24章 IOCの活動

第25章 財政構造

第26章 オリンピック出場選手の階層分析

第7部 オリンピックの影響

第27章 スポーツの普及

第28章 スポーツの公共性と私的資本の関連

第29章 オリンピックと世界平和

第30章 オリンピック（スポーツ）と資本主義論

おわりに

3. 各部と章の概要

（1）第1部の概要

第1部「課題設定」の部分は、『一橋論叢』2005年8月号（第133号、第8号：通巻776号、一橋大学一橋学会）に掲載した。内容は、課題設定というタイトルが示すように、オリンピックを巡る問題状況、先行研究の分析を通して、本研究のタイトルである「オリンピックと資本主義社会」が何故に成立するか、そしていま、何故それを設定する必要があるのかを述べた。

先述したオリンピックの総体的な研究とは何か。それはオリンピックの誕生、発展、課題等が網羅されていることは言うまでもないが、問題はオリンピックの単なる年代的な変遷ではない。実際、各大会の記録集は夥しい数に上っている。そうではなく、ここで言う総体的とは社会科学として、オリンピック（大会と運動を網羅して）が誕生し、発展してきた資本主義社会との関わりを解明することである。その点では近代スポーツそれ自体が資本主義社会の産物であり、その中で発展

してきた。その点ではオリンピックと近代スポーツとは近似值的に併行して検討されるであろう。しかし、先行研究を見ると、この当たり前の「資本主義社会内でのオリンピック」という視点が決定的に弱く、事実とは乖離している。社会科学とは先ず事実を前提にして出発する。この点で、何が事実かということと、なぜ資本主義社会の検討が避けられてきたのかの解明も重要である。

特に、オリンピックが直面してきた内的原因、外的原因によるそれぞれの課題は、資本主義社会に誕生し、発展してきたが故に、資本主義社会の持つ矛盾や問題点とは不可分である。

(2) 第2部の概要

第2部は、オリンピックはなぜ復興されたかである。「はじめに：時期区分について」では、オリンピックの歴史を内的、外的な矛盾を抽出しながら、内的矛盾の質的な変化を持って時期区分する方法を用いた。それは外的な矛盾に影響を受けながらも、発展の源泉はあくまでも内的な矛盾の質的な変化にあると考えるからである。これを歴史展開に置き換えると第4章から第11章(第5、6章は除く)となる。

「第4章 19世紀のヨーロッパと体操・スポーツの誕生」は、資本主義社会の形成期に近代スポーツや体操がなぜ誕生したのかを、先進資本主義社会における身体形成要請(労働力、兵力)、余暇活動の普及、社会的統合力の必要性などから検討する。

特にスポーツはイングランドの中産階級を中心に、そして1800年代後半にはアマチュアリズムと結合して全世界へと普及した。この過程で、ドイツやスウェーデンで普及していた体操を凌駕した。なぜなのか。

アマチュアリズムとはこれまで労働者階級の排除によるスポーツ分野における中産階級の独占を意味してきたが、それは19世紀末のヨーロッパ先進資本主義国の高揚する労働運動に対する中産階級自体の統合としても決定的な役割を果たした。まさに「創られた伝統」(E・ホブズボウム)である。この「排除と統合」を内包するが故に、

興隆する労働者階級の脅威に対抗する上からも、アマチュアリズムと結合したスポーツが受容された。それ故、かくも急速に普及したと考えられる。

「第5章 オリンピック「復興」の先行例」は、17世紀辺りまで含めた長期の視点で、資本主義社会の形成期、ヨーロッパ各地での地方的運動会がオリンピックという名称を冠して開催されていた。それは19世紀に入って頻度が増したが、この辺りを、イギリスのコッツウォルト(ドーバー)オリンピック、マッチウェンロックオリンピック、ギリシャのザッパスオリンピックなどを事例に取り上げながら、それらの競技会がなぜ開催されたのかを検討する。未だに階級差の厳しい時代でありながら、一応、全住民の参加可能性を謳っている。この辺りも解明したい。19世紀後半はヨーロッパにおけるギリシャ回帰が興り、オリンピックの認知度もかなり高く、オリンピックの受容度も徐々に高まっていたと言える。

「第6章 オリンピズム：クーベルタンの思想と行動」は、クーベルタンの思想形成である。1870年の普仏戦争に敗北し、ドイツの支配下での屈辱と、労働者階級の政治的力量的形成を世界に示した1871年のパリ・コンミュンという大事件は、青年(1863年1月1日生まれ)の思想形成にとって決定的な影響をもたらした。

当時の没落しつつある貴族に生まれ、フランスの救済のためにやがて体育・スポーツ教育の意義に目覚め、体育推進を掲げ、やがてそれがオリンピックに帰着する。しかもオリンピズムという理念を掲げ、世界平和を祈念するようになる。こうした背後には19世紀末の反映するヨーロッパの一方で、列強の露骨な帝国主義の対立も目の当たりにして、やがて予想される対戦への危機感から、多くの平和運動も模索された。フランスの共和制運動に参加したクーベルタンは、スポーツを通しての世界平和としてオリンピックの復興に行き着いた。それは貴族としての勲功やノーブレス・オブリージ(J・マカールン)であろう。こうして、1937年までの全生涯を、全財産を投入してオリンピックの復興と発展に邁進したクーベルタン

は、オリンピック復興の主体的条件である。既述のように当時の社会の歴史的発展段階は世界的イベントを求めている。その典型が1851年ロンドン以降の万国博覧会の開催である。オリンピックの復興も、もしもクーベルタンがいなくとも、誰かが、何らかの形でオリンピックに類似した世界大会を開いて行ったに違いない。それが当時の客観的条件である。しかし一方で、クーベルタンという強烈な主体的条件を得ることによってオリンピックは誕生した。この点でクーベルタンの功績は偉大である。クーベルタンの個性がなければ、オリンピック復興は多くの紆余曲折が予想される。この点でクーベルタンという個性が歴史の進歩を促進したといえるであろう。古代ギリシャオリンピックの再現を目指しながらも、クーベルタンも時の子であり、近代のスポーツ、体操を加味しつつ、万博の開催要綱から多くを取り入れながら、そして当時の国際的政治関係の課題（例えばナショナリズムとインターナショナリズム）を巧みに対応しながら、「スポーツの万博としてのオリンピック」（内海）を開催した。

（3）第3部の概要

かくして誕生したオリンピックはその後100余年の苦難の歴史を辿るが、しかし、近現代社会の中にあってこれだけ継続している国際的文化行事は他にない。そしてこれだけ世界に普及している行事も比類がない。「第7章 オリンピック誕生（過程）」はオリンピックの誕生過程をより焦点化したものである。特に第1回のアテネ大会はその後オリンピックが直面する多くの問題を内包していた。財政問題、ナショナリズム問題、IOCの確立等々。近代スポーツ、オリンピックが西欧の「発明」にもかかわらず、世界中で受容された理由は、スポーツ文化の普遍性や西欧の優位性もあるが、帝国の時代の「創られた伝統」、国民国家の形成とナショナリズムや近代科学知識の形成上からも近代義務教育制度の確立を通しての体育教育の浸透等、多くの促進要因が寄与した。

アマチュアリズムの労働者階級排他とブルジョアジーの統合もまたそこに与した。こうして、オ

リンピックのナショナリズムとインターナショナリズムは以降、多くの問題を提起した。特にアテネ大会自体、1896年3月25日という独立記念日に開会され、大会成功によるギリシャ国民のナショナリズム高揚によって、翌年にはトルコ帝国への戦争へと突入したくらいに、オリンピックは初回からナショナリズムとは不可分であった。

さらに資本主義の国内外の諸差別もまたスポーツ界に持ち込まれ、オリンピックもそれらの闘技場ともなった。国内的には階級差別（Classism：アマチュアリズム）、女性差別（Sexism）、人種差別（Racism：少数民族抑圧、アパルトヘイト）があり、国家間差別としては、南北格差（G A N E F Oを典型）、新独立国（旧植民地）の低水準、社会主義差別（東西ドイツ、2つの中国、2つの朝鮮）、先進資本主義内のキリスト教圏に対するイスラム圏の劣位（この一環にイスラエル＝パレスチナ問題も入る）などがある。これらは、それぞれの国際政治経済社会の動向に規定されながらオリンピックの問題史を形成した。それゆえに、これらの問題点は資本主義社会の中に位置付けられ、解釈されることが必要である。先行研究で最も弱いと感じられるのがこの点である。

「第8章 オリンピックの始動期（誕生、不安定）」は近代オリンピックの誕生と困難期（1894～1920）である。第2回パリ大会（1900年）、第3回セントルイス大会（1904年）、第4回ロンドン大会（1908年）は共に、万博の一環として開催された。それしか国からの援助がなかったからである。結果的には散々たるものオリンピックの危機ともなった。どうにか独自大会として確立し得たのは、第5回ストックホルム大会（1912年）であった。しかし1914年の第一次世界大戦の勃発は1916年に予定していたベルリン大会を中止に追いやった。こうしてオリンピックは戦争によって危機に陥った。が、終戦直後の1920年のアントワープ大会で、復活した。

「第9章 オリンピック確立期」は、1920～1948年である。この時期は戦間期を中心と

して、第二次世界大戦を経て、戦後最初のロンドンオリンピックまでである。戦間期は第一次世界大戦後の経済成長の中で、一方では1917年の史上初の社会主義国・ソ連の誕生とそれによる資本主義国の福祉へのインパクトは大きなものだった。それゆえに、資本主義内の諸差別への反抗とそのための運動も高揚した。つまり労働運動の高揚、社会主義党の進出、女性の参政権等々の前進である。しかしその一方で、急速に発展しつつあった後進資本主義国（ドイツ、イタリア、日本）のファシズムを伴った台頭があった。

これはスポーツ分野でも同様で、オリンピックがブルジョアジー、白人男性中心であるとして、オルタナティブつまり、労働者スポーツ運動、女性スポーツが前進した。こうして、Classism, Sexism, Racism の克服をスポーツ界が大きく内包した。結局これらの克服の課題は、戦後のスポーツ・フォー・オールへ引き継がれた。

1936年のベルリンオリンピックはナチスドイツの政治宣伝の場と化した面もあり、さらにユダヤ人差

別も起きたが、オリンピック史上多大な実績を残した大会でもあった。皮肉なことに、政府の全面的な介在故に、オリンピック運営資金の大半を国家が負担するという新たな局面をも形成した。1938～1945年は第2次世界大戦に突入したために、1940年の第11回東京大会と1944年の第12回ロンドン大会は中止となり、再度、オリンピックは危機に直面した。

「第10章 オリンピック発展期」は、1948年のロンドン大会以降、1980年までの期間である。この時期は社会主義国が急増し、植民地体制が一気に崩壊して、多くの貧しい独立国が誕生した。これらの国々の国連参加、非同盟諸国運動の形成は国連の勢力図を少しずつ変えていった。それと同時に、それらの国々を取り込もうとするアメリカとソ連の覇権競争、そして冷戦構造へと突入した。それに連動して、多くの国のナショナリズムが再び高揚した。これらはオリンピッ

クをも直撃した。

下記は、脱植民地化に伴うIOC参加国の激増を示している。これにより彼らの発言力の増大はRacismの克服へ大きく貢献した。それゆえ、アジア、アフリカ諸国の参加は1960年代に参加が急増した。表1はオリンピックデビューの年代と国数であるが、第二次世界大戦後も多くの国々が参加している。表2はIOC委員に占める各大陸からの選出数であるが、ヨーロッパが最も多い。その数は1954年から1990年では1名減であるが、アフリカからは2名から14名へ、アジアからは10名から18名へと大きく増大した。そして表3はアフリカとアジアのNOCとしての承認国数であり、アフリカでは1960年代に一気に22カ国が承認されている。これらから分かる事は、戦後の独立国の多さと、それらの国々の殆どがオリンピックへ参加した事である。

表1 オリンピックデビューの年代と国数（夏季大会のみ）

1896～1936	48～60	64～72	76～88	92	合計
58	39	40	35	5	177

- * 1 第二次世界大戦前のデビュー国は先進国
- * 2 1948～60年の参加国はいわゆる旧イギリス植民地が多い
- * 3 1964～88年の参加国はアジア、アフリカ国が多い
- * 4 1992年は旧ソ連からの独立国が多い

表2 IOC委員の構成

IOC Membership

	1954	1977	1990
Africa	2	13	14
America	16	18	19
Asia	10	13	18
Europe	39	38	38
Oceania	3	3	4
TOTAL	70	85	92

表3 NOC承認国

Recognition of NOCs in Africa and Asia		
	Africa	Asia
1910s	1	3
1920s	0	1
1930s	0	1
1940s	0	8
1950s	5	5
1960s	22	6
1970s	7	3
1980s	6	8
1990s	7	6
Total	48	41

それと共に、1960年代以降オリンピック・ソリダリティが始まり、発展途上国への援助が始まった。これはソ連によるアフリカ諸国へのスポーツ援助によって、多くの資本主義国の参加するIOCが刺激を得て、行い始めたものであると言われている。(Mansour, S.Al-Tauqi, *Olympic Solidarity: Global order and the diffusion of modern sport between 1961 to 1980*, A doctoral thesis, Loughborough University, April 2003.)

この時期はまた先進諸国における福祉国家が高度経済成長を経験し、その一環にスポーツ・フォー・オール政策を具体化させ、国民全体へのスポーツ普及に乗り出した。この過程で、戦間期に高揚したオルタナティブとしての労働者階級や女性へのスポーツ普及は、名目上は克服されることになった。しかし、90年代の新自由主義の影響によって、国民全体へのスポーツ普及というスポーツ・フォー・オール政策の理念は、現実には貧富の格差を再び大きくもたらし、実質的には画餅化している。この点については、福祉国家の方法が、限界かの議論も起きている。

この間、政治的諸課題がオリンピックに持ち込まれた。・東西対決とボイコット(イスラエル問題、東西ドイツ、2つの中国、南北朝鮮)、・南北問題とボイコット(Racism アパルトヘイト、G

ANEF O)、・アラブテロ(1972年:ミュンヘン大会:イスラエル問題)等である。これらがオリンピックを利用し、オリンピックの危機を拡大した。

さらに、この時期の後半にはオリンピックのテレビ放映権が高騰し、それによるIOC等の財政力が一定程度上昇した。そして選手たちの高度化が進み、もはやアマチュアとしての限界に達していた。それ故、多くの種目でプロ化は必然の方向であった。

第一次世界大戦、第二次世界大戦の直後にも関わらず、オリンピックは急速に復活し、戦争で疲弊した世界の人々への平和の希望を与えた。これはオリンピック自体が有する平和運動としての性格が顕現したものであるが、それではなぜかくも急速に復活を遂げることが出来たのであろうか。両戦争は後進資本主義国のブルジョアジーと政府と軍部が一体となり、先進資本主義国の独占していた植民地の再分割に強引に参入したためであるが、一方、その戦争からの回復も自らの統合原理であるアマチュアリズムを主導原理とするスポーツ、オリンピックで再度の世界的ブルジョアジーの結束と優位性の誇示を可能としたからである。両大戦直後はいずれもブルジョアジーに大敵の労働者階級運動(労働運動、労働者政党、社会主義国)の大きな飛躍があり、ブルジョア世界にとって大いなる脅威となっていたからである。

それでは、これまでオリンピックの主導原理であったアマチュアリズムの祭典としてのオリンピックにとって、70年代から80年代にかけて、アマチュアリズム崩壊以降のオリンピックの主導原理は何であるのか。これ自体は大きな研究課題でもあるが、現在の私の仮説を述べれば、確かに商業化による資本という見方も出来るが、スポーツ組織である故に、スポーツを通しての平和運動ではないかと考える。この点は、いっそう詳細に論じられる必要がある。

「第11章 オリンピックの新たな飛躍」は、1984年以降のオリンピックのグローバル化(市場化、TV放映化、プロ化)に伴う、新たな

危機と可能性の進展である。I O Cとしてもテレビ放映権だけでなく、オリンピックロゴの販売を手始めとするT O P (The Olympic Program)による経常的な収益の開拓である。こうしてI O C自体が企業化を促進した。そうした収益の配分の一環にオリンピック・ソリダリティがある。

本章は、第7部とも関わり、縮小されるかもしれない。

(4) 第4部の概要

先ず「第12章 I O Cの組織原則」でI O Cの特異な組織原則を分析する。周知のようにI O C委員は国連のような各国からの代表制ではなく、I O Cが独自に選出し、各国に派遣するいわゆる「バチカン方式」である。それ故に、これまでも貴族集団だ、非民主的だ...と言われてきた。これはクーベルタンがI O Cを設立した当時の諸事情を踏襲しながら、現在に続いている原則であるが、一方で100年余も継続している実績は侮りがたい。

そして「第13章 I O Cと財政(公的援助、資本獲得、商品化、放映権料、)」「第14章 オリンピックの公共性」「第15章 アマチュアリズムとプロ化」「第16章 ナショナリズムとインターナショナリズム(国歌、国旗、表彰、代表)」「第17章 ドーピングと勝利至上主義」「第18章 ジェンダー・人種」はオリンピックの内的矛盾と認識される矛盾であるが、これらは資本主義社会での分析が求められる。

(5) 第5部の概要

そしてオリンピックの外的矛盾として「第19章 政治的利用」が、「第20章 経済的利用」が分析される。前者では資本主義社会の東西問題(2つのドイツ、2つの中国、南北朝鮮)、南北問題(G A N E F O)、アパルトヘイト、テロ、ボイコット、プロパガンダ、国内統合などがあり、後者では、TV化・招致活動・買収、景気刺激、都市インフラ形成への利用などがある。本稿の冒頭にも掲げたように、そして近年のオリンピック招致のすべてに共通することは、それがスポーツの振興というのは単なる枕言葉化し、むしろこの

政治的ないし経済的利用が実質的であるということである。

(6) 第6部の概要

第6部は日本の資本主義発展とオリンピックの発展であり、これまでの1~5部で展開したことから、日本での展開との関連を問うことになる。「第21章 J O Cの誕生と背景」「第22章 理念」「第23章 J O Cの組織」「第24章 J O Cの活動」「第25章 財政構造」「第26章 オリンピック出場選手の階層分析」である。

(7) 第7部の概要

第7部はオリンピックの影響というか、オリンピックの平和運動としての実績を実証したいと考えている。これまで教条的にI O C憲章が叫ばれてきたけれども、平和運動としての実証的研究はきわめて少ない。この点は早急に解決されなければならない。そのためにも、いかなる課題を、いかなる方法論で展開するか、きわめて大きな課題である。

現在はやや仮説的であるが、「第27章 スポーツの普及」で、オリンピック・ソリダリティをはじめとして、オリンピックのスポーツ発展への貢献について検討する。オリンピックの名声故に、そしてオリンピック大会が全世界のテレビ視聴への影響、貢献もさることながら、ソリダリティ活動の経緯、今後の可能性についても検討したい。

「第28章 スポーツの公共性と私的資本の関連」は、オリンピックの公共性として、公的援助と私的資本との関連である。I O C自体は資本主義社会に生きる組織として一定の自立的資金を必要とする。1970年代までは極貧の状態、いつ崩壊するかもしれない財政状態であった。これを支えたのが、I O C委員たちの寄付であり、大会においては国家や都市からの補助金であった。そしてそれはまたオリンピックがその開催国、開催都市における一大公共イベントとして開催されたのである。

1984年のロサンゼルス大会は自治体予算を一切ストップされた中での開催故に、そしてグローバル化しつつあった世界企業がそれを可能にさ

せ、一気に商業化への傾斜を強めた。それ以降「オリンピックは儲かる」との風潮を生み、それ以降招致都市が増加したが、同じく資本主義の最先端であるアメリカでの1996年のアトランタ大会での商業主義化に危機感を抱いたIOCは、「今後、国や都市の援助を得られない所には、開催権を与えない」と明記した。これは公共の物心両面の援助を何よりも必要としていることの証明であると同時に、オリンピック自体の公共的性格を反映したものと捉えられるべきである。

「第29章 オリンピックと世界平和」はオリンピック研究の今後の最も基本的テーマとしたい点である。「オリンピック休戦 The Olympic Truce」は現実には確かにそれほど威力を発揮しているわけではない。しかし、平和祭典としてのオリンピックがたとえ2年ごとであろうとも、休戦と平和を呼びかけることには大いなる意義がある。さらに国連と連携していることは、オリンピック・ソリダリティや、その他の世界的平和運動を考える上で、いっそう重要である。

そして資本主義社会における諸差別（階級、女性、人種など）はオリンピックにも入り込んできたが、むしろオリンピックはその克服に率先して邁進してきたのではないか。そうであるならば、そうした諸差別の克服も平和運動の一環としての範疇に入れて考えて良いのではないか。ソリダリティ活動もこの範疇に入るだろう。

そして「第30章 オリンピック（スポーツ）と資本主義論」は、オリンピックと資本主義社会との関連に伴って、この分野でのこれまでの資本主義論の整理を行う。もちろんスポーツ論一般に拡大すれば、その作業は膨大なものになるだろうが、一定部分の取り込みは不可避である。特にスポーツとナショナリズムの関連は最近の日本でも、世界的にも喫緊の課題である。また、体制的な研究者によるマルクス主義批判の常套手段として使われるネオ・マルクス主義の教条的なスポーツ論は、私なりの批判もしっかりと行いたい。その上で、科学的なスポーツ資本主義論を展開したい。これらの作業はこれだけで数年を要するかもしれな

い。

おわりに

以上、オリンピックを資本主義社会の文脈の中に起き、その中ですべての問題を解釈することを、オリンピックの総体的研究と考えている。もちろんこれまでの個々の研究はそれぞれに有る一面を指摘し、その範囲では正しく、妥当であるが、それらを全体の文脈の中で考える営みは相対的には弱かったといえるだろう。本研究ではそうした総体的研究に挑んでみたいと考えている。

[文献]

（以下は、2005年7月現在までに参考にした文献である。今後はいっそうの文献検索が求められるであろう。尚、本研究では日本語と英語、そして本を中心とした。）

世界史

- ・E・ホブズボウム他編『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992年
- ・E・ホブズボウム『帝国の時代 1875 - 1914』『帝国の時代 1875 - 1914』野口建彦訳、みすず書房、1993年
- ・同『我が20世紀・面白い時代』三省堂、2004年
- ・同『産業と帝国』未来社、1984年（新版1996年）
- ・同『20世紀の歴史：極端な時代』三省堂、1996年
- ・同『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店、2001年
- ・谷川他『近代ヨーロッパの情熱と苦悩』世界の歴史22、中央公論新社、1999年
- ・ジェイムズ・ジョル『ヨーロッパ100年史 1』みすず書房、1975年
- ・桜井万里子編『ギリシャ史』山川出版社、2005年

オリンピックの通史的研究

- ・伊東 明 『オリンピック史』 逍遙書院、1963 年
- ・Guttman,A.,*The Olympics : A history of the Modern Games*, University of Illinois Press, 1992
- ・ Hill,C.R., *Olympic Politics, Athens to Atlanta 1896-1996*,Manchester University Press,1996
- ・ Johnson,W.O., *The Olympics :A History of the Games*, The Time,1996
- ・ Blundell,N. &Mackay,D., *The History of the Olympics*, Parkgate Boos,1999
- ・ Roche,M., *Mega-events & Modernity-Olympics and Expos in the Growth of Global Culture*, Routledge, 2000
- ・ 結城和香子 『オリンピック物語』 中公新書ラクレ、2004 年
- ・ 広畑成志 『アテネからアテネへ』 本の泉社、2004 年
- ・ Henry,B. & Yeomans,P.,*An Approved History of the Olympic Games*, The Southern California Committee for the Olympic Games, Los Angels, California.
- ・ IOC, *The International Olympic Committee: One Hundred Years*,Vol.1,2,3,IOC,1996
- ・ J O C 『近代オリンピック 100 年の歩み』 ベースボール・マガジン社、1994 年
- ・ Pelle,K., *Historical Dictionary of the Modern Olympic Movement*, Westport, Conn.: Greenwood Press,1996
- ・ Miller,D., *Athens to Athens: the official history of Olympic Games and IOC,1894-2004*, Mainstream Publishing company (Edinburgh),2003,
- ・ IOC, International Symposium, *The Legacy of the Olympic Games,1984-2000*,14-16 November, 2002,Lausanne,2003
- ・ Findling, J. et. al.(ed),*Encyclopedia of the Modern Olympic Movement*, Greenwood Press,2004
- ・ Buchanan,I. & Mallon,B., *Historical dictionary of the Olympic movement*, Lanham, Md.: Scanecrow Press,2001
- ・ Lord Killanin & Rodda,J., *The Olympic Games:80 years of people, events and records*, London: Book club associates,1976
- ・ K.Toohy,K., & Veal,A.J., *The Olympic games: a social science perspective*,CABI,2000
- ・ IOC, *The International Olympic Committee ;One Hundred Years, Volume 1-3*,IOC,1994
- 特定時期と伝記風
- ・ Pierre de Coubertin, *Olympism, Selected Writings*,IOC,2000
- ・ ピエール・ド・クーベルタン 『オリンピックの回想』 カール・ディーム編、ベースボール・マガジン社、1976 年
- ・ アベリー・ブランデージ 『近代オリンピックの遺産』 (宮川毅訳)、ベースボール・マガジン社、1974 年
- ・ Guttman,A., *The games must go on: Avery Brundage and the Olympic movement*, New York: Columbia University Press,1984
- ・ ロード・キラニン 『オリンピック 激動の歳月：キラニン前 I O C 会長による五輪回想録』 ベースボール・マガジン社、1983 年
- ・ J・マカルーン 『オリンピックと近代 - 評伝クーベルタン』、平凡社、1988 年
- ・ J・マカルーン編 『世界を映す鏡 - シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック - 』平凡社、1988 年
- ・ D・ミラー 『オリンピック革命 - サマランチの挑戦』 ベースボール・マガジン社、1992 年
- ・ 小石原美保 『クーベルタンとモンテルラン』 不昧堂出版、1995 年
- ・ Young,D.,*The Modern Olympics*, The Johns Hopkins University Press,1995
- ・ Durry,J., *Coubertin, autography 1/1889-1915*, IOC, 2003
- ・ M.S.Al-Tauqi, *Olympic Solidarity: Global order and the diffusion of modern sport between 1961 to 1980*,A doctoral thesis, Loughborough University, April 2003.
- ・ *The 1896 Olympic Games*, Bill Mallon, McFarland & Company,1998
- ・ *The 1900 Olympic Games*, Bill Mallon, McFarland

& Company,1998

・ *The 1920 Olympic Games*, Bill Mallon, McFarland & Company,1998

・ Mandell,R.D., *The First Modern Olympics*, University of California Press, 1976

問題領域的

・ J・ミラー 『オリンピックの内幕』、サイマル出版社、1980年

・ 藤原健固 『国際政治とオリンピック』道和書院、1984年

・ A・トムリンソン他編 『ファイブ リング サーカス』 柘植書房、1984年

・ Segrave, J.O.,& Chu, D.ed., *The Olympic Games in Transition*, Human Kinetics Publishers,1988

・ 池井 優 『オリンピックと政治学』丸善ライブラリー、1992年

・ V・シムソン、A・ジェニングズ著 『黒い輪 - 権力・金・クスリ：オリンピックの内幕』光文社、1992年

・ A・ジェニング 『オリンピックの汚れた貴族』サイエンティスト社、1998年

・ 谷口源太郎 『日の丸とオリンピック』文藝春秋、1997年

・ Robert,B., Stephen R.W., Martyn,Scott G., *Selling the Five Rings-The International Olympic Committee and the Rise of Olympic Commercialism-*, The University of Uta Press,2002

・ Pound,R.W., *Inside the Olympics*,Wiley,2004

・ *Proceedings of the First International Symposium for Olympic Research*, London, Ont.: University of Western Ontario,1992

・ *Critical Reflections on Olympic Ideology* ,London, Ont.: Centre for Olympic Studies,1994

・ Senn,A.E., *Power,Politics, and the Olympic Games*, Champaign, Ill.:Human Kinetics,1999

・ M.de Moregas Spa ed., Nancy Rivenburgh, James F. Larson, *Television in the Olympics*, London: John Libbey, 1995

・ Lucas,J.A., *Future of the Olympic Games*, Human

Kinetics books,1992

・ Pasolucki,A.(ed), *Postmodernity and Olympics*, Gdansk 2003